

2021年11月28日 午前礼拝 説教者:堺希望兄
「神のみこころを行う者は、いつまでもながらえます」

Iヨハネ2:12-17

12.子どもたちよ。私があなたがたに書き送るのは、主の御名によって、あなたがたの罪が赦されたからです。

13.父たちよ。私があなたがたに書き送るのは、あなたがたが、初めからおられる方を、知ったからです。若い者たちよ。私があなたがたに書き送るのは、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。

14.小さい者たちよ。私があなたがたに書いて来たのは、あなたがたが御父を知ったからです。父たちよ。私があなたがたに書いて来たのは、あなたがたが、初めからおられる方を、知ったからです。若い者たちよ。私があなたがたに書いて来たのは、あなたがたが強い者であり、神のみことばが、あなたがたのうちにとどまり、そして、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。

15.世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。

16.すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。

17.世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。

①聖書の厳しさの動機

聖書には、読んだだけではとても厳しく感じられるものが多くあります。律法を始めとし、毎月取り扱わせていただいている、このIヨハネもそうです。たとえば、以下の様なみことばは厳しく感じられるかもしれません。

神を知っていると言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。

しかし、みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。それによって、私たちが神のうちにいることがわかります。

Iヨハネ2:4-5

光の中にいると言いながら、兄弟を憎んでいる者は、今もなお、やみの中にいるのです。兄弟を愛する者は、光の中にとどまり、つまづくことはありません。

Iヨハネ2:9-10

こういう言葉を読んでいると、「あなたは命令を守っていないから偽り者だ」とか、「あなたは兄弟に嫌悪を抱くことがあるから、今も闇の中にいるのだ」という冷酷な責めに聞こえる方がいらっしゃるかもしれません。

しかし、そうではありません。このIヨハネも、聖書全体も、私たちを冷たく見放したり、「努力しなければいけない」という孤独なハードルを強調しているわけではないのです。むしろ、優しく力強い励ましのためのものです。

ヨハネは、今日の箇所、どうしてこれまで厳しく見えることを書いてきたのか話していません。

子どもたちよ。私があなたがたに書き送るのは、主の御名によって、あなたがたの罪が赦されたからです。

父たちよ。私があなたがたに書き送るのは、あなたがたが、初めからおられる方を、知ったからです。若い者たちよ。私があなたがたに書き送るのは、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。

小さい者たちよ。私があなたがたに書いて来たのは、あなたがたが御父を知ったからです。

父たちよ。私があなたがたに書いて来たのは、あなたがたが、初めからおられる方を、知ったからです。若い者たちよ。私があなたがたに書いて来たのは、あなたがたが強い者であり、神のみことばが、あなたがたのうちにとどまり、そして、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。

I ヨハネ 2 : 12 - 14

ここでは 3 種類の人に呼びかけがされています。子どもたち、もしくは小さい者たち。父たち。そして若い者たちです。これは、霊的な成長のことです。神様との歩みがまだ少ない霊的な子どもたち。激動の戦いの最中にある霊的若者たち。そして成熟しつつある霊的父たちを励ますためなのです。

とても大事なことは、呼びかけの全部が過去形で書いてあるということです。私たちがこれから何かをできるため、達成するためではなく、すでに神様が私たちにしてくださったことに揺るがない土台があることを思い出させるためなのです。

子どもたちから見てください。イエス様を信じて間もない子どもたちへの言葉です。何よりもまず「主の御名によって、あなたがたの罪が赦されたから」です。すべての土台はここにありますね。すでに罪が赦され、私たちは神の子どもとされ、受け入れられているのです。救われるために、私たちが神様にしたことは何もありませんでした。できることもありませんでした。

ただ、イエス様が自分から地上に来てくださって、私たちが愛してくださいました。神様から見て、私たちは何一つ益にならない、罪人でした。私たちに何か価値を見出したからではなく、価値がないのにいのちを捨てて十字架にかかってくださったのです。このイエス様がしてくださった死と復活を、ただ信じるだけで神様は完全に赦し、子どもとしてくださいます。

そのことは、「御父を知った」とも言われています。神様と他人ではなくなり、敵でもなくなり、父と子になったのです。ですから、自分が神様に受け入れられるために、何かをつけ足す必要はないのです。

世の中との戦いの最中にある若い人たちに対しては、「悪い者に打ち勝ったから」と送られています。すぐに思い出すのは、同じヨハネが福音書で書いたイエス様の言葉です。

わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。

ヨハネ 16 : 33

世の中は、神様の価値観とは違うので、聖書に従おうとすると必ず困難に当たります。真っ先にその患難にぶつかり、勝利されたのはイエス様です。イエス様は、正しいことを行っていたのに、祭司長や律法学者たちをはじめとした多くの民衆に妬まれました。彼らは自分たちがしていることが神様のみこころにかなっていない事を目の当たりにした時、罪を認めるのではなく正しいイエス様を殺したのです。それはこの世ではイエス様の敗北に見えましたが、神様の目には勝利でした。イエス様は神様のみこころにかなう正義と愛を全うしたので、勝利したのです。

クリスチャンが神様のみこころを行おうとすると、悪魔の妨害があります。しかし、これから勝つのではなく、すでに打ち勝っているのです。イエス様がすでに悪魔に勝利しておられるので、イエス様に従う時には困難があっても、すでに勝たれたイエス様がともにおられるので、クリスチャンもすでに勝利しているのです。

私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。

ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。

ヘブル 4 : 15-16

最後に、成熟した霊的な父たちへの言葉です。「初めからおられる方を、知ったから」と言われています。私自身が今、多分父にはなっていないので実感は難しいのですが、神様のことを救い主や勝利された方である以上に、「初めからおられる方」として実感したためと言われています。

これらのことが何を言いたいのかと言うと、「自分たちが既に揺るがない地位にいることを思い出すため」です。どうして聖書が厳しい線引きをするのか。それは「神様に救われたあなたはこっちにいるんですよ」と教えるためです。既に闇ではなく光、偽り者ではなく愛に生きる者なのです。

しかし、私が実際兄弟を憎んでいたため、みことばを読んで裁かれたように感じたように、裁かれていると感じる方もいるかもしれません。そのような場合にまず覚えておいていただきたいのは、神様は私たちに罰を与えるために言っているのではなく、神様との正しい関係に戻そうとみことばを下さっているということです。

なぜなら、神様の愛は途絶えないからです。裁かれているという感覚がなぜなのか、容易には分からないかもしれません。その時には、「いつも命がけで愛してくださっている神様。どうして裁かれているように感じているのか教えてください」とお祈りすることをおすすめします。信頼できるクリスチャンに話してみられるのも良いかもしれません。そしてもし

自分の罪が原因であると示されたならば、

もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

Iヨハネ 1 : 9

のみことばのとおり、待っていてくださる神様に、正直に打ち明けるなら、神様との間の壁が取り除かれていきます。

ですから、厳しい線引きは、私たちに神様がしてくださったことを思い出させ、はっきりとさせるために書かれています。

②世的とは

世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。

すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。

世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行う者は、いつまでもながらえます。

Iヨハネ 2 : 15-17

「世」を愛するなと続けて書かれています。「世」と聞くとどのようなことをイメージしますか。世俗的という言葉が日本語にあります。辞書を見るに、「下品である」という言葉の様です。確かに世俗的と聞くと、高尚でないことというイメージがあります。しかし、聖書が示す「世的」とは少し違います。

そして、この「世を愛する」を間違えて捉えるケースが多いです。そうすると世を愛さないとは、修行の様なイメージになってしまいます。カトリックの修道院は、4世紀にクリスチャンへの迫害が終わり、教会が生ぬるくなったことに由来します。一部の人々は、徹底的に信仰に生きたいと願い、教会や社会から離れて自分たちで暮らすようになったのです。それが全てではないでしょうが、修行によって自分を高めることに似ています。「世を愛する」という言葉の取りようによっては、流行りのテレビを見てはいけないとか、職場の集まりに行ってもいけないとか、そんな風に間違えてしまうことがあります。

同じヨハネが書いた福音書に、有名な 3:16 があります。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

ヨハネ 3 : 16

ここでは神様が「世を愛された」ことが書いてあります。イエス様を送ってくださったことについてです。こちらでは神様が「世を愛した」のですが、Iヨハネでは「世を愛するな」とあります。この違いは、何のために愛しているのかということです。

イエス様が愛したのは、罪人ひとりひとりでした。イエス様には何の見返りもないのに、いのちを投げ出したのです。それはひとりも滅びずに、イエス様を信じて永遠のいのちを持つためでした。自分の為ではなく、私たちのためだったのです。

しかし I ヨハネに書かれている愛は、「肉の欲」「目の欲」「暮らし向きの自慢」などを愛することです。肉の欲は、自分を満たすために愛すること。目の欲は表面的な判断で愛すること。暮らし向きの自慢は人よりも優れていることを見せようとするプライドを愛することです。それらは神様の見ている価値ではなく、人が自己中心の為に欲する価値なので、神様とは相容れないのです。

これは人類の始めの罪、エバの記事にもあります。

そこで、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」
そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。
創世記 3 : 4-6

神様は、アダムとエバの為にエデンの園に食べるのに良いあらゆる果樹を備えてくださいました。神様は園の中央に2本の木を植え、その内の「善悪の知識の木」からは取って食べてはならないと言われました。しかし蛇は、「食べたらず必ず死ぬ」と神様が言われたのに対して、「決して死にません」と言った蛇を信じました。

それは、エバが神様に従って幸せであるよりも、自分が神になって幸せを決めたいと思ったからでした。エバは自分の欲望のために神様に対して信頼をやめたのです。本当は食べるのに良い木の実がたくさん神様が備えてくださったのに、エバは自分で決めたかったのです。この自己中心こそが罪です。

よく、この善悪の知識の実を食べた時に罪が入ったと言われますが、私はその前の蛇との会話の時点で、エバの心には罪があったと思います。実そのものに罪があるわけではないからです。

イエスは言われた。「あなたがたまで、そんなにわからないのですか。外側から人に入って来る物は人を汚すことができない、ということがわからないのですか。そのような物は、人の心には、入らないで、腹に入り、そして、かわやに出されてしまうのです。」イエスは、このように、すべての食物をきよいとされた。
また言われた。「人から出るもの、これが、人を汚すのです。
内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」
マルコ 7 : 18-23

イエス様は、物に心を汚す力があるのではないと言われました。汚れているのはただ人の心なのです。

しかし人は、罪にまみれているのが実は自分の心であることを認めたくはありません。それで、別のものが汚れていることにして、自分を高めようとしてしまうのです。

しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。

それは、うそつきどもの偽善によるものです。彼らは良心が麻痺しており、結婚することを禁じたり、食物を断つことを命じたりします。しかし食物は、信仰があり、真理を知っている人が感謝して受けるようにと、神が造られた物です。神が造られた物はみな良い物で、感謝して受けるとき、捨てるべき物は何一つありません。神のことばと祈りとによって、聖められるからです。

Iテモテ4:1-5

私たちに備えられている食べ物も財産も、楽しいことも、すべては神様が与えて下さっているのです。それは感謝して受け取るようにと神様が差し出して下さっている恵みです。神様だけが、私たちを赦し、その上すべてを満たすことのできる天におられる私たちのお父様なのです。

ですから、Iヨハネに戻りますが、ここで「愛してはなりません」と言われているのは物とか世の権力とかではなく、世の価値観のことを言っているのです。本来神様に向けなければならぬ一番の愛を他のものに向けるといことです。世の中は、生まれながらの欲望を満たすために頑張ります。見た目で価値を決めます。財産をどれくらい持っているかで偉くならうとします。それが一番だからです。しかしそれは神様の価値観ではありません。神様の価値観はみこころが行なわれること、すなわち神と人を愛することです。

なぜなら、イエス様の救いにあずかった人は、自分の罪から解放されたのです。自分の欲望を満たす道は終わりが来ます。財産で価値を決める道は終わりが来ます。しかし神様に愛される道は、今から始められます。しかも、終わりがありません。本当に満たして下さる方は神様ただお一人だけなのです。

皆様が置かれているこの世の関係の中で、皆が自分を満たす欲望や表面的な物、財産に価値を置く中で、本当に価値のあるもの=イエス様の愛に価値を置いて生きる時、それが大きな証しになります。どんな場所でも、神様と近く生きることができるのです。神様の価値観にならって生きるその時、私たちを通して、神様がご自身の素晴らしさ、ご栄光を現わしてください。

最後に、暗証聖句を一緒に読みましょう。

愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。

愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。
神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。
私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。
Iヨハネ4：7-10

【説教:堺希望兄】